

『航米日録』に見る玉虫の表現意識

——外国地名表現からの一考察——

湯浅彩央

1. はじめに

本稿は、湯浅（2013，以下，前稿）につづき『航米日録』における外国地名表現から玉虫左太夫¹⁾（以下，玉虫とする）の表現意識を探ることを目的としている。

その『航米日録』は、安政5年（1858）に締結した日米修好通商条約の批准書交換のためにアメリカに派遣された使節団正使の新見正興の従者、玉虫の記録である。万延元年（1860）1月18日に米船ポーハタン号にて品川を出港、ハワイ経由で太平洋を横断してアメリカに渡り、大西洋、喜望峰を経て同年9月28日に帰国するまでの見聞記を8巻²⁾にまとめた。この万延元年使節団は、副使は村垣範正、目付小栗忠順のふたりを加えた3人が首脳を務め、この他16人の正使および正使の従者や召使、医師等を加えた総勢77人の大使節団であった。なお、この使節団でアメリカに渡った人々が記した記録は『万延元年遣米使節史料集成（全7巻）』（風間書房）に収められている。

前稿では、『航米日録』の外国地名表現の特徴を示した。本稿は、その中でもっとも特徴的な地名表現<アメリカ>を中心に考察を行う。具体的には、前掲の同使節団の記録との比較、当時の地理書等の参考書を調査し、玉虫の表現意識に迫る。まず、次節では『航米日録』の<アメリカ>表現を取りあげる。なお、外国地名の実際の表記を示す場合には「 」で、それらを総括して示す場合には< >で表すことにする（例：「ニーヨルク」「ネーヨルク」「新約克」「新約」と<ニューヨーク>）。

2. 『航米日録』における<アメリカ>表記

『航米日録』（巻1～8）における<アメリカ>を表す形式をまとめると、表1のようになる。空欄は各項ゼロである。以下、同じ。

表1：＜アメリカ＞表記

	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	計	累計	構成比 ³⁾ (%)
花旗国	7	3	9	6	14	5	16	19	79	143	57
花旗	9	16	9	9	4	4	5	8	64		
亜墨利加	1	1						1	3	61	24
亜米利加		1	7	1	1	5			18		
亜	2	5	7	5	4		18		41		
アメリカ						2			2		
米利堅国					1				1	31	12
米利堅	1		2					1	4		
米国								1	1		
米	13	1	2		1	4	3	1	25		
合衆国	1	3		2		7		3	16	17	7
ウエナイトステート					1				1		
										252	100

表1のとおり、『航米日録』における＜アメリカ＞を示す用例は252例あるが、大別すると「花旗」類「亜米利加」類「米利堅」類「合衆国」類の4類に分けられる。以下、この順に考察を行う。

2-1. 「花旗」類

「花旗国」「花旗」は143例、57%ともっとも多用される形式である。実際に用例を見ていこう（二重線は稿者による。一重線は底本どおり）。

- (1) 今日花旗国始祖華盛頓生辰ナリト云。(巻1・20頁⁴⁾)
- (2) 一時許過ギ花旗国人来ル。(巻2・71頁)
- (3) 午牌花旗国船一艘ローノツケノ右ヲ過ギ、互ニ船号ヲ称シテ各礼ヲナシテ駛ル。
(巻3・85頁)
- (4) 扱草花ヲ愛スルハ花旗国一統ノ習ヒニシテ、祝礼等アレバ坐中必ズ草花ヲ飾ル。
(巻4・104頁)
- (5) 花旗国総説(表題)
花旗国ハ〈海国図志云、因船插星旗広東人謂之花旗〉北亜米利加洲中ニアリテ一名米利堅国ト云、又「ウエナイトステート」ト云フ、合衆国ト云義ナリ。
(巻5・145-146頁)
- (6) 閏三月廿日ノ事(表題)
今日ニ至リ、花旗国ネーヨーク港ニ近キシガ、政府ヨリ俄ニ先ヅ華盛頓府ニ至ルベシト中心アリ。(巻8・241頁)
- (7) 今日ニナリテハ花旗人ト互ニ相親ム。(巻1・13頁)

- (8) 申後晩飯ヲ喫ス、何レモ花旗ノ割烹ニテ、味美ナラズトイヘドモ枵腹ヲ養フニ足ル。
(巻2・51頁)
- (9) 已後官吏上陸ス。花旗船一艘入港ス。互ニ祝砲ヲ発ス。(巻6・173頁)
- (10) 蘭人ノ装ハ男女共花旗人ニ異ラズ。(巻7・204頁)
- (11) 辰後花旗ノ商船一艘ニ逢フ、互ニ船号ヲ唱ヒ、暫時談話シテ別ル。(巻7・208頁)
- (12) 今聞、貴国与花旗和好。(巻8・231頁)

「花旗」類では「花旗国」が「花旗」より僅かに多い。用例を見ると、「花旗国」は<アメリカ>を指すのはもちろんのこと、接辞に「人」(用例(2))「船」(3)を接続している。接辞(「人」「船」「館」)を伴うのは「花旗」がほとんどであり、「花旗人」は40例、「花旗船」5例「花旗館」1例と、接辞を伴う全形式を合計すると「花旗」の72%に相当する。このことから、「花旗」は接辞を伴いやすい利便性の高い表現と言えよう。

ところで、「花旗国」は(5)のように表題にも登場する。玉虫は漢字・片仮名両表記の外国地名では、表題に漢字表記、本文に片仮名表記という具合に、書き分けの意識があったと解される⁵⁾。換言すれば、表題の漢字表記は本文の片仮名表記に比べ改まり度が高いということである。(5)の引用文以降は、アメリカの地理・人口・名産・歴史的解説が続き、その際もつばら「花旗」類が使われている。このように表題、本文で多用される点を鑑みれば、玉虫は<アメリカ>を記録する際、意識して「花旗」類を選択・使用していると言えよう。それは「花旗国ハ北亜米利加洲中ニアリテ一名米利堅国ト云、又「ウエナイトステート」ト云フ、合衆国ト云義ナリ」という一文を見ても明らかである。「亜米利加」は大陸名、「米利堅」「ウエナイトステート」は「花旗国」以外の国名の紹介、意味は「合衆国」という解説であり、あくまで主語は「花旗国」なのである。ここに玉虫の表現意識が端的に表れている。なお、『海国図志』にある星条旗を見て中国(広東)人が<アメリカ>を「花旗」とした由来をあげているが、同使節団の木村鉄太の『航米記⁶⁾』(第一篇)にも「一米利堅合衆国其管領スル処ヲ「ユアナイツテイド」ト云フ。共和治ノ意ナリ。国ヲ「メリケン」ト名ク。清国ニ花旗国ト云フ(3頁)」と同内容の記載がある。使節団の団員は渡航前に学習したか、あるいは航海中に知識を共有したのであろう。

用例(12)は支那人との筆談である。筆談ではもつばら「花旗」を使い、「花旗国」は見えない。3-1で取りあげる森田岡太郎も支那人との筆談でのみ「花旗国」「花旗」を用い、それ以外では「亜米利加」類「米利堅」類「合衆国」である。当時の中国では「亜米利加」「米利堅」より「花旗」が一般的であったのだろうか。前掲の『航米記』の記述を見ても一般的であったと考えられるが中国の地理書等については3-2に述べる。

以上のように、同使節団の人々は「亜米利加」「米利堅」を多用するなか、玉虫は「花旗」類を意識的に選択している。では「亜米利加」はどのような使用場面・表現意図で用いているのだろうか。

2-2. 「亜米利加」類

「亜米利加」類は「亜墨利加」「亜米利加」「亜」「アメリカ」の4形式が存する。

- (13) 物価 (表題)
諸什器其地ニ産スルモノ少ク、都テ英吉利・亜墨利加・仏蘭西・支那・和蘭ノ諸邦ヨリ輸入ス。価極メテ貴シ。(巻1・41頁)
- (14) 扱此港ハ金山ニ近ク、且曲湾ナル大 門ニシテ下碇ニ便ナルヲ以テ、欧羅巴及亜墨利加ノ商船隊ヲ結び来リ、目現数百艘櫛比ス。(巻2・58頁)
- (15) 閏三月七日之事
ロノーク船ハ、南亜墨利加アスヘンワル港ヨリ来リ、船中ニテ…(巻8・240頁)
- (16) 今朝ヨリ舟ノ左ニ当リ群山点々見ユ。是中亜米利加ノ内テユルスト云フ処ナリ。
(巻2・70頁)
- (17) 把納麻 (表題)
此巴納麻ハ北亜米利加ト南亜米利加ト結合セル有名ノ咽喉ナリ。独立新瓦刺那達ニ属シテ一國ヲナス。此辺総称シテ中亜米利加ト云フ。(巻3・74頁)
- (18) 故ニ譬ヘバ一年ノ中ニ夏ニ冬アルガ如シ。瘴癘ノ気アリトイヘドモ、亜米利加地ニ比スレバ少シク薄カルベシ。(巻3・76頁)
- (19) 芭蕉多シ、実ヲ結ブ、形チ三角ニシテ長シ。数十ノ実一房ヲナシ、味甘フシテ尤美ナリ。亜名ヒナ、ト云フ。(巻1・39頁)
- (20) ネビヤールト メールス アエラント 形勢 (表題)
サンフランシスコ港ヨリ十里許浜リ<亜里三十里ト云フ>、一小島アリ。(巻2・62頁)
- (21) 且ツハナマヨリアスヘンワル迄亜ノ四十七里ナリ。(巻3・73頁)
- (22) ブラシユル国<南アメリカ洲北海岸ノ国>ノ北岸ニ沿テハ、其差僅ニ東ス。(中略)
夫レヨリ東岸ニ沿ヒ遠ク南行シ、ケイブホウレン<南アメリカ洲最南ノ岬>ノ方ニ於テハ其差二点東ス。(巻6・182頁)

まず「亜墨利加」であるが、巻1・2・8にのみ使用され、巻2の用例以降「亜米利加」へと変化する。ただし、(13)(14)を見ると、「亜墨利加」は単独用法であるのに対し、(16)(17)の「亜米利加」は接頭語「中・北・南」が伴う。「亜米利加」は18例使用され、このうち接頭語のないものは僅か2例である。ただし(15)の「亜墨利加」も接頭語を伴うため、玉虫にとって「亜墨利加」と「亜米利加」は意味的にはあまり違いがなく、参考書の表記による異形式とも考えられる。しかし上例を見ると、「亜墨利加」は他国と並列した用法((13)(14))であるのに対し、「亜米利加」は(18)以外は大陸の位置を示す用法のため、「北・南・中」等の接頭語が付されている。なお、(13)(14)は「物価」「風俗」と、日記とは別立ての項目内にあり、地理書、歴史書、訳書等の参考書を見て書写したと目される。同様に「亜米利加」も大陸の位置を正確に記す必要があり、地図を見て記述したと考えるべきであろう。このため、「亜墨利加」「亜米利加」は参考書をもとに記述したため、「花旗」類ではなく「亜米利加」類を用いたと推察される。

つづく「亜」は、(19)(20)のように「亜名」「亜里」の用法である。これは、「<アメリカ>の名称」、「<アメリカ>の測量法」という意味・用法であり、簡略用法と位置づけられる。単独に用いられている(21)も「<アメリカ>の測量法」を意味し、簡略表現に当たる。この

ように「亜」は接頭語的用法・簡略用法であることがわかる。

一方、片仮名の「アメリカ」は僅か2例であり、近接した位置に使用される（22）。これは「方針ノ差」という項目内で、いずれも< >の補注内に存する。原本の確認を要するが、早稲田大学図書館蔵本⁷⁾では、< >の割注は原文1行に対し2行書き込むため、漢字表記ではスペースが不十分であった可能性が高い。また、この<ブラジル><ケープホーン>には滞在しておらず、記録する必然性は低い。しかし、玉虫は各地域においてどのように緯度・経度が異なるのか関心が高かったため、世界各国および都市の緯度・経度を詳細に記録している。そのため、前述の2地名は玉虫にとって未知な場所のため補ったのであろう。補注という目的上スペースを考慮し、片仮名表記したと解される。

以上のように「亜米利加」類は参考書をもとに記述していることが明らかとなった。

2-3. 「米利堅」類

「米利堅」類は4形式ある。以下、用例をあげる。

(23) 花旗国総説（表題）

花旗国ハ〈海国図志云、因船插星旗一広東人謂ニ之花旗一〉北亜米利加洲中ニアリテ一名米利堅国ト云、又「ウエナイトステート」ト云フ、合衆国ト云義ナリ。（巻5・146頁）

(24) 路傍ノ人雲霞ノ如ク群リ、米利堅行ノ快事ヲ見。（巻1・8頁）

(25) 又北方ニ当リ、米利堅ノ内、花地近島セイベロト云フ処ノ燈火台遙ニ見ユ。

（巻3・85頁）

(26) 先刻ノ筆語中ニ英吉利・米利堅ヲ夷ト称ス、今彼船ニ託シ来リ、其卑下ノ語万一彼ニ聞ヒナバ大害ヲ生ズベシ、爾後筆語スベカ（ラ）ズト、新見君ノ断ナリト云。

（巻8・229頁）

(27) 之レ米国製貨ノ定則九百分ニ稍近シ。（巻8・245頁）

(28) 万延元年庚申春正月十有八日、正使外国御奉行豊前守新見使君・副使外国御奉行淡路守村垣使君・御目付豊後守小栗使君、其外属官・従臣、総計七十七人、各軽装ニテ、米州華盛頓へ条約ヲ結ント 廟命ヲ蒙リ、彼ヨリ艤シタルホーハタン<船名>へ乗り渡ラレケル。（巻1・8頁）

(29) 夜ニ入り暴風雨トナリ、怒濤ノ舐ル、処舟殆ド摧ケントスルコト数次ニ及ビ、船上歩行スル能ワズ、或ハ葡匐或ハ米人ニ助ケラレ行ク。（巻1・16頁）

(30) 故ニ喜望峰ノ通船多クハ此ニ来リ風信ヲ待チ、或ハ煤石等ノ欠乏ヲ補ヒ、常ニ数十艘ニ下ラズ。今次予等来リシトキ、英・米・葡ノ船舶二三十艘碇泊ス。（巻6・175頁）

(31) 貨幣（表題）

此地ニテ鑄製セズ、葡萄牙ヨリ輸入ス。銀・銅多シ。円形ニシテ英米ノ用フル所ニ異ナラズ。（巻6・177頁）

(23) の「米利堅国」はこの1例のみである。これは「花旗」類でもあげたが、<アメリカ>

に関する地理・歴史等を詳細に記述した項目であり、「花旗」以外の国名としてあげており、正確を期し、改まりの高い「国」を付加したと思われる。「米利堅」はおそらく American の音を漢字に当てたものであろう。

「米利堅」は巻1・3・8に使用される。(24)は目的地,(25)は<アメリカ>における位置を表しており、前節の「亜米利加」類との意味・用法の違いは見出しにくい。ところが(26)は<イギリス>と並列用法として用いられており、後述する「米」に多い用法である。ここでは「英吉利」と省略せず記述したため、<アメリカ>もそれに倣い「米利堅」としたと考えられる。

「米国」は少なく、(27)の1例のみである。先行研究⁸⁾において、「○+国」を簡略表記とし、多くの資料に見受けられるのに対し、『航米日録』ではこうした「○+国」形の簡略表記はこれのみである。なお、3-1でとりあげる同船した森田は「亜国」「米国」を用いる。こうした点からも、玉虫は音訳語ではなく、中国由来の「花旗」で<アメリカ>を描こうとしたのであろう。

そして「米利堅」類で最も多い形式が「米」である。これは主に2つの用法で用いられる。第一は(28)(29)のような接頭語的用法である。これは前節「亜」と同じである。「亜」は下に「名」「里」「海」「陸」と<アメリカ>の名称、測量法、アメリカ大陸という意味で限定的な用法であるのに対し、「米」は「州」「人」「船」「館」等、一般的な語が接続する。この点は(27)「米国」にも通じる。第二は(30)(31)のような他国との並列用法である。これは「米」特有の用法である。玉虫はアメリカ訪米に際し、多くの参考書で学習し、<アメリカ>だけでなく外国を写しとろうとした。そのため、<アメリカ>と並列して他国の情報も可能な限り記述したため、並列用法が多くなったと考えられる。

2-4. 「合衆国」類

- (32) 当島ハ其任ニ当ラザレバ、父兄ト雖ドモ其下ニ居ルト云。王ハ必ズ王族ノ内ヨリ人物ヲ選ミ、其位ニ即カシム、合衆国ノ如シ。(巻1・35頁)
- (33) ^{サンフランシスコ}散汎思斯哥⁹⁾形勢(表題)
此都府ハ合衆国ノ西岸ニアル新カルホルニヤ部ノ港ナリ。(巻2・54頁)
- (34) 貨幣(表題)
此府銀舗数所アリ。造営極メテ巨大ニシテ、合衆国ノ貨幣皆此処ニテ鑄造スト云フ。(巻4・129頁)
- (35) 此貨ノ一個ハ、凡千八百四十年ノ頃、太平洋ニ遠ク漂流シタル日本ノ水夫輩ヲ教育扶助セル合衆国ノ測量船ノ将官、彼輩ヨリ受タル数貨ノ一個ナリ。其後、合衆国ノ船難ニ係リテ彼諸貨ヲ失亡シ、只此一個ノミヲ残セリ。是ヲ花旗ニテ日本貨幣ヲ試ムルノ始トス。(巻8・244-245頁)
- (36) 花旗国総説(表題)
花旗国ハ<海国図志云、因船插星旗一広東人謂ニ之花旗一>北亜米利加洲中ニアリテ一名米利堅国ト云、又「ウエナイトステート」ト云フ、合衆国ト云義ナリ。(巻5・146頁)

(32)は船が破損しハワイに停泊した際のハワイの王位に関する記述であり、前節までの国名

表現<アメリカ>とは意味を異にする。それは「法律で規定された制度」という意図が含意されている点である。

また(33)は日記本文とは別立ての項目内で、<アメリカ>大陸の<サンフランシスコ>の位置説明である。(35)は「ノ測量船」「ノ船難」と続くように国名<アメリカ>を意味する。なぜ、「亜米利加」類「米利堅」類ではなく、「合衆国」なのだろうか。用例を見ると、(34)は造幣局の様子、(35)は日本の貨幣（小判等）をアメリカで分析した記述であり、貨幣の種類、金銀の割合、アメリカ貨幣の相当価格等を詳細に記録している。(34)は<アメリカ>の貨幣の製造であり、公的性が高い。また(35)は天保11年（1840）に漂流した日本人を救出した際の記述である。「是ヲ花旗ニテ日本貨幣ヲ試ムルノ始トス」とあるように、おそらく日本の貨幣を取り扱う契機となった場面であるため、「亜米利加」類「米利堅」類ではなく「合衆国」を選択したのではないだろうか。なお、「今次フクトルヒヤニ至リ、彼レ我国ノ貨幣ヲ分析ス。友人某翻譯セルヲ左ニ記ス（243頁）」とあり、沼田氏の注に「友人佐野鼎の奉使米行航海日記の四月二十七日の条に「此の時分析せる諸貨幣の分量を詳かに之を訳す」とあって本書と同趣旨の記述がある（同頁）」とあり、佐野鼎の翻訳を参考にしたため、「合衆国」を用いたとも考えられる。ただし、次の「是ヲ…」以下では「花旗」を用いており、佐野の翻訳をそのまま書写したのではなく、玉虫が意図的に「合衆国」と「花旗」を使い分けたと考えるべきであろう。そのため、公的性が高く、制度として確立した意味・用法の場合は「合衆国」を用い、玉虫自身の補注、意見は「花旗」という具合に書き分けられたと考える。

「ウエナイトステート」は前にも引いた「花旗国総説」の冒頭部で「花旗」以外の呼び名として紹介したものである。<アメリカ>総説のため、英語読みも記載したのであろう。『航米日録』ではこの1例のみである。

以上、玉虫は参考書による記述では「亜米利加」類「米利堅」類「合衆国」を使用するが、それ以外の日々の出来事、彼自身の感想、思考は「花旗」類を用いる傾向が明らかになった。また、参考書を参照した場合も、公的性が高い場合は「合衆国」を選択し、「亜米利加」「米利堅」は大陸の位置に多用されることがわかった。では同行した人の記録、当時の地理書類はどうであったのか。

3. 同使節団の記録、地理書類との比較

本節ではまず同行した人の見聞記の様子を示し、当時参考にした地理書・歴史書がどのように記述されているのかを検討する。

3-1. 『亜行日記』の様子

本節では、万延元年遣米使節に勘定組頭として随行した森田岡太郎清行¹⁰⁾（以下、森田とする）の『亜行日記¹¹⁾』における<アメリカ>表現を概観し、玉虫と比較する。表2に結果を示す。

表2：『亜行日記』における<アメリカ>表記

	1	2	3	4	5	6	計	累計	構成比
花旗国						1	1	3	2
花旗						2	2		
亜墨利加国	1						1	58	35
亜墨利加	1				1		2		
亜米利加	5		3	2	2		12		
亜米理駕		1					1		
亜美利加			2				2		
亜美利駕			2				2		
亜国	10	1	4	4		1	20		
亜	5	4	1	2			12		
アメリカ	2	2		2			6		
米利堅	1	9	4	4	5	1	24	49	29
米国	2		1				3		
米	2	4	2	6		2	16		
メリケン		1	1	1		3	6		
合衆国	4	7	20	9	12	5	57		
								167	100

玉虫同様、「花旗」類、「亜米利加」類、「米利堅」類、「合衆国」の4種が存する。以下、用例をあげ、具体的に見ていく。

3-1-1. 「花旗」類

玉虫ではもっとも多用されていたが、森田はわずか3例で、場面も支那人との筆談に限定されている（括弧内は引用者により補った）。

- (37) 現在花旗国換以凡四員大東金貨品位恐不了（森田）
駕上到此有何貴幹澳門係日本要回是否（支那人）（6・260頁）
- (38) 此境商估何等之故不好花旗金貨乎，偶交換則減價幾分太作怪（森田）
花旗金太低故不合用（支那人）（6・258頁）

前節でも述べたが、玉虫も支那人と筆談した際、「花旗」を用いる。当時、中国では「花旗」類が一般的であったと推測されるが、中国の資料については3-2に述べる。

3-1-2. 「亜米利加」類

森田は「亜米利加」類を多用している。実際の例を見ていこう。

- (39) 正月十八日 晴

- 一、亜墨利加国江条約為取替御用トシテ正使外国奉行新見豊前守、…（略）（1・3頁）
- (40) ホノルル在留亜墨利加合衆国医師 キルロウ（1・16頁）
- (41) 六月二十五日陰
一当所産ニテ椎ノ実ニ似タルモノアリ、煎テ食ス、ヒーノツト云、一名グロンドノツトト云、高サニフート計リノ草ニシテ、実地中ニ生ス、南北亜墨利加并亜勿里加ニ多ク産ス、合衆国ト英仏ニ国エノ貿易品トス、又榨テ油ヲ多ク出ス、（3・222頁）
- (42) 亜米利加人常ニ此諸島ニ友睦ニ在リ、彼等亜国人既ニ此処ニ白檀木ノ大貿易アリ、是ヲ支那ニ売販セリ、（略）（1・25頁）
- (43) 一亜米利加政府貸附金一ヶ年五分ノ利足、尤自己相對ノ分ハ高利モアル由、（3・101頁）
- (44) 一亜米理州ノ産 ^{モンケイ}猿 巴納麻ニテ生擒セシ由ノ猿、黒面ニテ毛並日本ノ如ク色同断大キサ猫程ニテ瘦セ人立シテ歩ス、（略）（2・79頁）
- (45) （日一九）地球説略北亜美利加大洲図説ノ内、（略）（3・95頁）
- (46) 地理全書亜美利加部ニ、楓樹高茂汁甘可以煎糖、海国図志北亜美利加部ニ、楓樹高茂其汁甘可煎糖、（略）（3・115頁）
- (47) 一亜国ミニストル ボルドン差支有之、尋問無之旨断有之、（1・13頁）
- (48) 亜国鯨獵一ヶ年凡五百艘ナリト書記サンジケルノ話、（3・101頁）
- (49) 九月十一日晴
一支那在留亜国ミニストルウエールス交替相済当港ニ居合セ候由以使節エ為逢尋問、（略）（6・256頁）
- (50) 亜長官及書記十六員及従臣ニシテソルチユール軍卒ヲ云五十二員ナリ、（1・38-39頁）
- (51) 且当湊亜船詰合カビテイン アータンス年比六十ヘルリト同ク日本へ渡海セシモノ入来饗応有之、（略）（2・78頁）
- (52) 日本人ハ亜国エ在留セバ亜国風ニ忽変化スベシ、亜人ハ日本エ在留スルトモ膝ノ屈伸アシク万事日本人風ニハ変化ナシガタカルベシ、（4・171頁）
- (53) アメリカ在留ミニストル并当島役人応接、次ノ間エ案内、此処浴室アリ、（略）（1・11頁）
- (54) 一英人我天保之度四十日余ニテ地球一周セシ由新撰年表ニ見エタリ、カビテインヘ承候処、アメリカヨリ喜望峰エカ、リ支那ホンコン迄凡四十八日、英ヨリ支那、支那ヨリアメリカ夫ヨリサンフラン、先ツ是ニテ凡一周ナレドモ四十日余ニテ航海通モ出来不致ト相答実歴ノ話ナリ、（2・70-71頁）
- (55) 一四時比男女凡二百人余何レモ役人ノ由家内并親類召連レ為逢入来、南アメリカ ^{フラシール}伯西児事務官当処相越罷在候旨ニテ為面会相越、（中略）日本大君ノ御年柄ナド承リ南アメリカエモ御使節御立寄ニテハ如何可有乎ナド申聞引取、（4・147-148頁）

まず「亜墨利加」から見ていく。(39) は日記冒頭文である。日米修好通商条約批准書交換のために渡航する目的が示されている。玉虫が「花旗国総説」に書いたように、ここでも正式名称として「亜墨利加国」と「国」を付しており、森田の渡航意識・使命感の高さがうかがえる。(40) も「亜墨利加合衆国」と、現在の名称を使用している。「医師」と続くことから、玉虫の「合衆国」

と同様、国から認定された法的意味を強く感じさせる。また(41)は「亜勿里加」と並記しており、簡略表記せず記す。「亜墨利加」は以上の3例である。

一方「亜米利加」は他の音表記「アメリカ」の中でもっとも使用率が高い。(42)の「～人」のように単独使用より接辞を伴うことが多い。造語力が高いため、使用率が高まったと考えられる。

「亜米理駕」は(44)の1例のみである。＜パナマ＞での記述であり、玉虫も生物の項目を設けているが、猿の記述は見えない。「巴納麻ニテ生擒セシ由」とあるため、参考書を見て書写したと解され、参考書の影響による異体字と思われる。

同様に、(45)「亜美利加」は『地球説略』(46)「亜美利駕」は『地理全書』を参照したとあり、これらの記述どおりに書写したため「亜米利加」と表記しなかったのであろう。

「亜米利加」類の中でもっとも使用されるのが「亜国」である。(47)(49)のように後に「ミニストル」が続く場合、森田は「亜国」を多用する。一方、玉虫は「米州ミニストル(巻1・33頁)」「花旗ミニストル(巻1・34頁)」「花旗国ミニストル(巻7・210頁)」の3例で、「亜国」はない。この他、(42)のように接辞「人」を伴うものもある。

(50)～(52)の「亜」は「長官」「船」「人」を接辞に伴う用法であり、この用法は玉虫も同様であるが、玉虫は一般的な語の場合は「米」を選択している点が異なる。

「アメリカ」は玉虫では補注での使用に対し、森田は現在と同じ用法で用いる。森田は(44)「^{モンケイ}猿」のように、漢字表記に英語読みのルビを片仮名で付しており、英語を積極的に記述している。なお、(53)(55)は森田自身の経験、(54)は資料による森田の見解を述べており、片仮名表記「アメリカ」を本文に採用したのは、英語を積極的に書写する森田の意識が作用していると考えられる。

3-1-3. 「米利堅」類

では、「米利堅」類ではどのように用いているのか。「米利堅」類は「米利堅」「米国」「米」「メリケン」の4形式がある。

- (56) 愚按、海燈税ノ事、仏蘭西米利堅トノ条約、入港ノ者ヨリ取立由見エタルハ誤リニヤ、(2・61頁)
- (57) 一フレガット蒸気船起発、川蒸気船米利堅ネウヨルゲニテ製造セシヨリ千八百四十一年ノ比同国ニテ發明セシ由、^{テリカラフ}電信機モ米利堅發明ノ由、(略)(3・92頁)
- (58) 右ウシロムキ候得ハ米利堅人ノ姿ニテ後口向ニテ踊ル、吾ガウシロメントイヘルニ近シ、(略)(4・173頁)
- (59) 一船ヨリ三里許沖合ニ帆柱ナキ大船孤島ノ如クに見ユ、四ヶ月前米利堅船暗礁ニ乗カケ船居スクミシナリト、船将物語、(6・249頁)
- (60) 当嶋米国ミニストル案内ニテ一時頃正副使同車コモドール タツトナル乗組御者一人、監察拙者同車ニテ当嶋米ノミニストル乗組御者一人、(略)(1・13頁)
- (61) 乗組迎船之人々并台場役人為逢来、台場一見可致由頻リニ懇請、当台場ハ米国最大一之要害ト云、(略)(3・109頁)

- (62) 一サントウキス坤輿図式，坤輿初問其它地球図ニアウスタラリノ附属トアリ，過日米人ニ問合セシニ，左ニアラズ太平海ノ孤島ナリト答，此説不穩，(略) (1・43 頁)
- (63) 一日本政府役人此処上陸入用三千ドルノアタリニ米政府ヨリ渡シ有之由，(2・54 頁)
- (64) 北京ノ入口アウ川則洋子江統ニテ，乗込間敷処エ乗込シ迎英ノヲシフル兩人ヘ支那人疵付ケシヨリ事起リシニテ，仏国ニテハ英ヘ援兵差出ス，米ニテハ援兵不差出ト船將物語，(3・97 頁)
- (65) 蘭ハ英米ニ異ナラズ，但頭髮エ鬢サシヲ入レシアリ，(6・247 頁)
- (66) 館ノ前広場ニメリケン国旗建有之，館五階ニテ，煉化石ニテ築上ケ，(略) (2・47 頁)
- (67) 併バナマ時候尽ク悪敷，熱病多ク甚案事候旨，右ハナアヤカラソウトメリケン相廻リバナマ着ニ相成候ハハ，同所ヨリアスヒンヲル迄テリカラフ，(略) (4・147 頁)
- (68) 乗組十七人メリケン人に被助サンフランシスコヘ上リ世話ニ相成居候処，(6・261 頁)

(56) は「仏蘭西」と並列して用いられる。並列用法の場合，他国が簡略表記の場合は，＜アメリカ＞も簡略表記が用いられる（用例 (65)）ように，最初の国名表記にあわせる。この場合も「仏蘭西」が簡略表記でないため，「米利堅」と記述したのであろう。(58) (59) は接辞に「人」「船」がつく。

「米国」は「ミニストル」を伴う (60) もあるが，用例は稀少である。この点は玉虫と重なる。

「米」は玉虫同様，(62) の「米人」(63) 「米政府」のように接辞を伴う用法，および (64) (65) の並列用法がある。

一方，片仮名「メリケン」は (67) が特徴的である。「ソウトメリケン」と英語表記している。玉虫は「東西南北」が付加する場合，「亜米利加」を用いたが，英語に長けた森田は片仮名で記す。この違いが両者の＜アメリカ＞表記の一番の違いと指摘できよう。なお，次節の用例 (70) では「南亜」のルビに「ソウトメリケン」を当てている。

3-1-4. 「合衆国」

森田は「亜米利加」類とほぼ同じ使用頻度で「合衆国」を多用している。

- (69) 今我等此諸島ニ住生ス，其人ハ合衆国，大貌利太泥亜，法蘭西，ゼルマニー国，ケタリ国，スパニヤ国，ホルトガル国，印度，支那并大概他ノ各国出生ナリ，(1・26 頁)
- (70) 一合衆国惣人別凡三千六百万，南^{ソウトメリケン}亜ノ方人別猶夥シキ由，何方ニテモ夷人日本人別承度狩候事，(3・89 頁)
- (71) 一古巴産物一ヶ年輸出高凡二千五百万ドル，(中略) 右ハ大抵合衆国トノ交易ノ由，(3・95 頁)
- (72) 日本初テノ航海何ノ微恙ナク甚満足欣喜ニ不堪，且合衆国国民一同歓喜セリ，(4・160 頁)
- (73) 是ハ第百八十九番水夫ベートルコミ，ヲ視則通り合衆国ノ測量蒸気船アクシフ船号且合衆国海軍ノ勤ヨリ差送ル事ヲ証ス，(6・262 頁)

上例では，(69) は他国との並列表記であり，合衆国の次が「英吉利」ではなく，「大貌利太

「泥亜」である点に注目したい。この前後は<ハワイ>に関する記述で、歴史・制度に続き(69)は在住外国人の出自を書きとめたものである。<イギリス>を通称「英吉利」ではなく「大貌利太泥亜」としたため、<アメリカ>も「亜米利加」類「米利堅」類ではなく、意識的に「合衆国」を並列表現に採用したと考えられる。

(70)以降の例は<アメリカ>全体を意味する用法と解釈できる。(70)は<アメリカ>の総人口、(71)は貿易国として、(72)は<アメリカ国民>全体を示す。また(73)は「合衆国海軍」と軍隊制度である。玉虫も公的性が高く、制度として確立した場合に「合衆国」を用いたが、森田はこれに加え<アメリカ>全体を意味する場合にも「合衆国」を使用しているのである。

以上、森田の<アメリカ>表現を見てきた。玉虫は日記本文および項目内においても自説を記す場合に意識的に「花旗」類を使用し、「亜米利加」類「米利堅」類は参考書を書写する際に用いるという傾向が見いだせた。また「合衆国」は参考書を見たなかでも、公的性が高く、制度として確立している場合に用いる。玉虫は漢学の素養が高く、中国由来の「花旗」類を意識的に選択して<アメリカ>を記述しようとしたのであろう。それに対し、森田は「花旗」類は支那人との筆談に限定されており、本文は「亜米利加」類「米利堅」類、「合衆国」をはほぼ同率で使用する。また玉虫には少ない片仮名表記も用い、積極的に英語を書写する意識がうかがえた。

3-2. 地理書・見聞記等、参考書の様子

本節では、『航米日録』と同時期、および玉虫が参考にした地理書類の参考書がどう表現しているかを見ていく。

まず中国の資料から概観しよう。日本に影響の大きかった『瀛環志略¹²⁾』(1848)は、

(74) 北亞墨利加米利堅合衆國 (表題)

米利堅 (略) 亞墨利加之轉音。或作美利哥。一稱亞墨理駕合衆國。又稱兼攝邦國。又聯邦國。西語名育士迭。亞墨利加大國也。因其船掛花旗故粵東呼為花旗國。(二重線は原文ママ)

と記す。音訳語の「亞墨利加」「米利堅」と意識語「合衆国」を使用する。解説に音と意味、また英語音<ユナイテッド>を「育士迭」と当てている。また、星条旗(花旗)から「花旗国」と呼ぶ由来も補っている。こうした書き方は玉虫の「花旗国総説」と同様であり、玉虫がこれらの参考書の記述に倣ったことがわかる。

中国で刊行されたアメリカ人牧師禱理哲(ウェイ)著、蘭学者箕作阮甫訓点の地理書『地球説略¹³⁾』(万延元年(1860))は、目録に「亞美理駕大洲圖説」「北亞美理駕大洲圖説」「南亞美理駕大洲圖説」と「亞美理駕」を用いる。なお、「北亞美理駕大洲圖説」では、「合衆國圖説又名花旗」(92頁)という項目を設け、『瀛環志略』同様「花旗國 (93頁)」と呼ぶ由来を述べる。

日本人作の地理書はどうか。箕作省吾訳著の『坤輿図識¹⁴⁾』(弘化2年(1845)刊)および『坤輿図識補¹⁵⁾』(弘化3~4年(1846~47)刊)は箕作省吾が刊行した世界地図『新製輿地全図』の解説書にあたる。前書には「亞墨利加」、後書は表題に「米利幹」、本文は「亞墨利加」「米利幹」を用い、音訳語「亜米利加」類「米利堅」類を採用している。

地理書以外では、清末から中国の遣欧使節の主たる報告書に『従東方到西方－走向世界叢書叙論集』がある。このうち、張德彝（1840）『歐美環遊記¹⁶⁾』を見ると、「合众国（合衆国）」が多く、この他「阿美里加」「米」があり、「花旗」は認められない¹⁷⁾。『航米日録』同様、日記体の紀行文であり、地理書とは性格が異なる。このため「花旗」類を使わなかった可能性も高い。文体等の考察は今後の課題である。

また中国同様、当時の日本において交流が盛んであったオランダの資料も参考になる。桂川甫周の『類聚紅毛語訳¹⁸⁾』（寛政10年（1798））は日蘭対訳意義分類体単語集である。その附録に『萬國地名箋』があり、ここでは「北 ノールドアメリカ（169頁）」「南 ソイドアメリカ（171頁）」と「亞墨利加」が用いられる。

また『類聚紅毛語訳』の編纂50年後の嘉永元年（1848）に箕作玩甫が編纂した『改正増補蛮語箋¹⁹⁾』は日蘭対訳単語集で、ここにも附録『萬國地名箋』がある。そこには「南北米里堅（465頁）」「米里堅諸島（470頁）」と「米里堅」、および「合衆国（466頁）」が採用される。オランダ語との対訳資料では音訳語「亜米利加」類「米利堅」類が採用され、「花旗」類は見えない。

4. おわりに

以上、『航米日録』および同時代の資料における＜アメリカ＞表現の特徴を見てきた。玉虫は自身の見解を述べる際に「花旗」類を使用し、参考書を書写した場合は「亜米利加」類「米利堅」類「合衆国」という具合に意識的に書き分けを行っていたことが明らかになった。当時の地理書等では音訳語「亜米利加」類「米利堅」類が多く使われていたのに対し、玉虫は漢学の素養が高かったため、中国の地理書類に依拠していたのであろう。同行した森田は「亜米利加」類「米利堅」類「合衆国」を多用し、「花旗」類は中国人との筆談のみの使用であり、当時の参考書類の書記法とほぼ重なる。それに対し玉虫は、音訳語「亜米利加」類「米利堅」類ではなく、意訳語「花旗」類を選択しており²⁰⁾、意味を重視していたと言えるだろう。この点は＜フロリダ＞を「花地（85頁）」と記していることから裏付けられよう。『類聚紅毛語訳』の附録には「勿羅洛多 フロリダ○花地ナリ（170頁）」とある。「勿羅洛多」は漢字表記、「フロリダ」が音を表し、「花地」は＜フロリダ＞の地名由来を表していると思われる。なお、後の『改正増補蛮語箋』では「花地」が見出し語となっている。

以上、外国地名表現＜アメリカ＞における玉虫の表現意識を考察した。しかし一国だけの表現ではなく、＜フロリダ＞等の由来を含め、同使節団員と比較する必要がある。さらに、中国の地理書、および今回扱えなかった中国紀行文との比較も残されている。あわせて今後の課題としたい。

注

- 1) 玉虫は仙台伊達藩士の家に生まれる。藩校養賢堂で学び、また藩儒斎藤藤真に儒学を修し、その才能を認められた。その後脱藩し、江戸に赴き大学頭林復齋に学ぶ。この間のちに外国奉行となる堀利熙と親交を深め、堀が箱館奉行に着任した際、安政元年（1854）、玉虫は『改正蝦夷全図』を出版する。安政4年（1858）には堀に随行し、約半年間蝦夷巡視を行い、その記録を『入北記』と題し、まとめる。『航米日録』は『入北記』同様、一日の欠落もない。

- 2) 巻1～7までは旅程に沿った記述であるのに対し、巻8は「秘書」とし、旅行中の感想、所見がまとめられており、性格が大きく異なる。前稿では考察対象から除外したが、本稿では玉虫の表現意識を探ることを主眼に置くため、対象に加えた。しかし、付録の旧外務省本より引用された新聞紙抄録は除外する。なお、引用本文は沼田次郎氏校注の日本思想大系所収の本文に拠った。日本思想大系の本文は、外国地名など片仮名で表記されているものの清濁はすべて底本（巻1・2・4・6・8は玉虫家所蔵本、巻3・5・7は宮城県図書館蔵本）どおりとあり、外国地名表現を考察するのに適当であると判断する。
- 3) 構成比は小数点第一位を四捨五入した。
- 4) 所在は日本思想大系の頁とする。なお用例は一部返り点を省略する。
- 5) 前稿参照。
- 6) 『万延元年遣米使節航米記』（第2版、1974、新潮社）を使用。
- 7) 沼田氏の解説によると、玉虫は帰国後の文久元年（1861）に藩主に報告を行い、賞賜を得たとし、この時に献上した本が「早稲田大学図書館現蔵の航米日録あるいはそれに近いと思われるが、何分にも端本で確証はない（557頁）」と述べる。早稲田大学図書館蔵本は「伊達菊重郎図書之印」「伊達朝宗蔵書」と刻した朱印が捺されているところから見て、伊達家旧蔵本であることは明らかである。（中略）遺憾ながら巻一から巻三までを含む一冊だけで、完本でない（560頁）」とも述べる。
- 8) 佐伯（1989）45頁。
- 9) 玉虫はいわゆるズーズー弁の特徴を有しており、「シ」と「ス」の混同が見られる。詳細は前稿を参照いただきたい。
- 10) 岡太郎は文化9年（1812）、享和元年（1802）生まれの2説ある。本姓は大城。安政6年（1859）に森田家に養子に入る。幕府における経歴によると、天保9年（1838）学問試業を受け、学問所出役を命ぜられ、翌年には学問所勤番となる。その後、出羽、甲斐、摂津河内和泉の三国等の代官をつとめ、安政5年（1858）勘定組頭となる。
- 11) 『亜行日記』の原本は森田家に存するが、「1・2」を欠く。本稿は河北展生氏編纂の『万延元年遣米使節史料集成』（第一巻）（1961、風間書房）所収を使用した。これは慶應義塾大学図書館本を底本としている。
- 12) 国際基督教大学図書館蔵本を使用。
- 13) 津山洋学資料館所蔵本を使用。
- 14) 注13に同じ。
- 15) 注13に同じ。
- 16) 左歩青訳、米江衣校注、走向世界叢書、湖南人民出版社を参照。
- 17) 孫（2005）によると、宣教師たちが記した<アメリカ>表記が中国方言の影響で異なることを指摘している。ブリッジマンは「美理哥」が「正音」で、「米利堅」「亜墨理駕」は「土音」、「訛」と主張していると述べる（333頁）。
- 18) 櫻井豪人編（2005）『類聚毛語訳・改正増補蛮語箋・英語箋 II 影印編』（港の人）を使用。
- 19) 注18に同じ。
- 20) 仙台市博物館には、玉虫家から寄贈された『航米日録』のマイクロフィルムが所蔵されている。そこには巻1の二月廿八日「米夷危シト…」を見せ消ちに「花旗人」と書き込んでいる（日本思想大系では「花旗人（18頁）」とする）。同様に、巻1、二月十四日に「乃チ當島在留ノ米国コンシユル」も「花旗国」と書き込んでいる（日本思想大系では「花旗国コンシユル（25頁）」）。沼田氏の解説では、「巻一・二は他人に書写させたものに自から加筆訂正を加えたもの、特に巻一の後半「散土微斯島」の部以下は自筆である（556頁）」とあり、書き入れは玉虫本人と考えられる。この書き入れからも玉虫が「米」「米国」ではなく「花旗」を意識的に使用していたことは間違いない。なお、この資料は浅野敏彦先生よりご教授いただいた。

参考文献

- 浅野敏彦（2011）「『航米日録』の漢語—古代漢語と近世中国語」坂詰力治編『言語変化の分析と理論』、おうふう
- 浅野敏彦（2012）「『航米日録』巻一～巻五の漢字について」『論究日本文学』第96号（立命館大学）
- 浅野敏彦（2013）「『航米日録』に見える振り仮名が付された漢字列について—振り仮名が「外来語」の例—」、第103回国語語彙史研究会、2013年4月27日発表レジュメ
- 佐伯哲夫（1986）「維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記」『神戸大学国語年誌』5（のち、『現代語の展開』（1989）和泉書院所収）
- 佐伯哲夫（1987）「官板バタバヤ新聞における外国地名表記」『関西大学文学論集』創立百周年記念特集（上）（のち、『現代語の展開』（1989）和泉書院所収）
- 櫻井豪人（2004）「『類聚紅毛語訳』附録『万国地名箋』について」『語彙研究の課題』和泉書院
- 櫻井豪人（2005）『類聚毛語訳・改正増補蛮語箋・英語箋 I 解説・対照表・索引編』港の人
- 孫 建軍（2005）「西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界——九世紀中頃までの漢訳洋書を中心に——」『日本研究』第30集（国際日本文化研究センター）
- 湯浅彩央（2013）「『航米日録』の外国地名表記」『立命館文学』第630号（立命館大学）
- 横田きよ子（2009）「『改正増補英語箋』便静居校訂本附録世界地名の典拠本について」『国文学研究ノート』45（神戸大学）
- 横田きよ子（2010）「ト部氏訳『改正増補英語箋』所載外国地名について：英版「ゴルドスミッス」氏ノ地理書地理書との比較」『国文学研究ノート』46（神戸大学）

